

半導体商社の「新基準」

コアスタッフ 戸澤社長の視点



③

偽造品と余剰在庫の終わらない戦い

現在のようにリードタイムが長期化し、調達が困難になると出てくるのが偽造品のリスクだ。巧妙に偽造された半導体はそれなりに経験がある人でも肉眼では判別がつかない。十分な検査体制がない仕入先から購入した半導体が偽造品であることを分からずに製品に搭載してしまふことがある。これが市場に出て不具合を起こすことを考えると非常にリスクが大きい。

半導体の偽造品を考えるにあたって1つ必要なのは知識がある。それはセツトメーカーやEMSが放出する余剰在庫だ。現在は日本を含めて世界中で余剰在庫を買収する会社が存在する。この余剰在庫が市場から調達する場合の主なソースとなる。

余剰在庫売却の際は、単純な価格だけで決めるのではなく、その在庫がどのように取り扱われるのか、信用が置ける企業との取引が必要となる。筆者は日本企業の海外への余剰在庫の売却は、日本の産業競争力に影響を及ぼす可能性があると考えている。日本企業の重要な部品が海外市場へ流出し、価格が大幅に高騰、国内で再調達が困難になることがあるからだ。

市場がよりタイトになり、これら余剰在庫も枯渇し始めると出てくるのが偽造品だ。偽造品は廃棄された基板や、先ほど述べた余剰在庫のうち再販できない製品を回収するところから始まる。これらをパッケージやピン数ごとに仕分けて保管し、偽造品の材料として

で行うのではなく、専門の検査機関を活用し任せるとも大切な。本来、セツトメーカーの検査リソースは自社製品の品質向上に向けての正しいからだ。今セツトメーカーに求められているのは、市場流通在庫における特採製品の検査プロセスの適正な構築だ。経営者がケアしなければならぬのは、対象製品の偽造品搭載リスクに対して、①製品が出荷できない場合の機会損失、②調達を正規ルートに絞ってしまった場合の購買部門の負担、③品証部門のリソース、をバラ

しかし、すべての半導体を100%正規ルートから購入することは難しい。ましてやリードタイムが長期化すると、どうしても製品出荷を優先させなければいけない場面も出てくる。そもそも、半導体メーカーが供給できない生産中止品を購入する際は、正規ルートではない市場流通在庫を購入する必要がある。大切なことはリスク管理である。

余剰在庫の海外への売却は、日本の産業競争力に影響を及ぼす可能性があると考えている。日本企業の重要な部品が海外市場へ流出し、価格が大幅に高騰、国内で再調達が困難になることがあるからだ。

市場がよりタイトになり、これら余剰在庫も枯渇し始めると出てくるのが偽造品だ。偽造品は廃棄された基板や、先ほど述べた余剰在庫のうち再販できない製品を回収するところから始まる。これらをパッケージやピン数ごとに仕分けて保管し、偽造品の材料として

正しくリスク管理をすることだ。どのような仕入先から入手したのか。偽造品が混入するリスクをあらかじめ正しく把握したうえで、適切なレベルの検査を行うことが好ましい。調達した半導体すべてに深い検査をする必要はない。リスクに応じた検査を行う仕組みを構築することだ。すべてを自社

そのため、日本企業は

利用する。偽造品は、①リードの再めつき、②表面印字の除去、③樹脂の黒色コーティング、④レーザーマーキングの順に行うことで、新品同様に作り替えられる。このように作り込まれた偽造品は経験が浅い検査員では捕捉することが難しい。しかし、十分な検査体制と設備、豊富な経験を持つ検査員がいる会社であれば高い確率で検出することが可能だ。セツトメーカーに大切なことは、現在のような不確実な調達環境を正しく認識し、市場流通在庫を完全に排除するのではなく、

正しくリスク管理をすることだ。どのような仕入先から入手したのか。偽造品が混入するリスクをあらかじめ正しく把握したうえで、適切なレベルの検査を行うことが好ましい。調達した半導体すべてに深い検査をする必要はない。リスクに応じた検査を行う仕組みを構築することだ。すべてを自社

正しくリスク管理をすることだ。どのような仕入先から入手したのか。偽造品が混入するリスクをあらかじめ正しく把握したうえで、適切なレベルの検査を行うことが好ましい。調達した半導体すべてに深い検査をする必要はない。リスクに応じた検査を行う仕組みを構築することだ。すべてを自社

正しくリスク管理をすることだ。どのような仕入先から入手したのか。偽造品が混入するリスクをあらかじめ正しく把握したうえで、適切なレベルの検査を行うことが好ましい。調達した半導体すべてに深い検査をする必要はない。リスクに応じた検査を行う仕組みを構築することだ。すべてを自社